

前回の本コラムで、「予習編にはあと『ふたつ』損失余命の考え方を知る上で大事な話が残っている」とお伝えしました。今回は、そのうちの一つ目の話、「『安全』と『安心』は同じではない」とはどういうことか？その内容を調べてみましょう。

ゆりちゃん：福島第一原子力発電所の事故直後、新聞記事で、「安全」と「安心」という言葉をよく目にしましたが、これらの用語が多く使われたのは、この事故がきっかけだったのですか？

タクさん：もちろん福島第一原子力発電所事故の影響はあったでしょうね。でも、それだけではなかったのですよ。図1を見て下さい。同図は、刈間理介・帝京平成大学教授(当時は東京大学・環境安全研究センター准教授)が2008年、「安全教育学研究」に投稿した論文ⁱに掲載されていました。朝日新聞・読売新聞・毎日新聞の全国版紙面において、「安全・安心」等の用語が1990年～2007年にわたってどのような頻度で使われてきたか？1年ごとに集計した結果を折れ線グラフで示しています。図から明らかのように、1990年代半ば以降徐々に増えてきましたが、21世紀に入って頻度が急激に上昇しています。中谷内一也・同志社大学教授(現在)は、著書「リスクのモノサシ」の中で、「この上昇の理由の一つ(きっかけ)は、2001年の第2期科学技術基本計画ⁱⁱにおいて、『めざすべき国の姿と科学技術政策の理念』の一つとして『安全・安心で質の高い生活のできる国』というものが政府によって設定されたことがあげられる。しかし、それ以降の数年も急激な上昇は続いていて、政府の科学技術政策だけが『安全』と『安心』等の言葉の流行を作り出したとは考えにくい。政府が音頭取りをしているというよりも、世の中全体の傾向として『安全』と『安心』が同時に求められていたであろう」と推測されています。

ゆりちゃん：半谷輝己氏は著書「それで寿命は何秒縮む？」の中で、「『安全』と『安心』は同じではない」と書かれていますが、いったいどこが違うというのですか？

タクさん：本書を読むと、まず、「自分がいま求めているのは『安全』なのか？それとも『安心』なのか？」と疑問を投げかけ、「このポイントを理解していると、不安な気持ちに心を支配され、冷静に考えられなくなって物事を誤解する事態を避けやすくなります」という記述が目飛び込んできます。なるほどと思いましたね。次に、「『安全』とは、自分たちで決めることができないものです。国などが定めた法律や条例で、規制された範囲内にあること。これが安全です。それに対して『安心』は、自分自身が『大丈夫だ』と納得したときに得られるものです」と述べて「安全」と「安心」の違いを説明し、「安心は自分の内からおのずと湧き上がるもの、安全は他者に与えられるもの」と持論を語ります。最後に結びで、「安全は達成できても、安心を強要することはできません」と述べてから、「消費者のみなさんが自身の『不安』を『安心』に変えるには、自分自身でさまざまな情報を比較して、『腑(ふ)に落ちて』納得する必要があります」と提言します。

ゆりちゃん：話の途中ですが、「腑に落ちて納得する」って一体、どんな気持ちなのかしら？

タクさん：あくまでも私個人の印象ですが、「正しく不安になることの大切さ！」すなわち、「やみくもに不安になったりするのではなく、『危険』の程度を把握した上でそれに見合った『不安』を感じ、相応の対策を施すことの大切さ」を伝えたかったのではないのでしょうか。このためには、リスクを「見える化」することが、対策を施すための第一歩になると思われたのでしょうか。そのため本書で、『腑に落ちて』納得するため

ⁱ 刈間理介『『安全・安心』等の用語使用の動向と安全教育のあり方について—わが国の新聞記事紙面および出版書籍の署名における用語の使用状況に関する検討から—』安全教育学研究第8巻第1号(2008)

ⁱⁱ 科学技術基本計画は、科学技術の振興に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るための基本的な計画であり、今後10年程度を見通した5年間の科学技術政策を具体化するものとして、政府が策定する。

には、専門的すぎる情報では、受け取る側の理解が追いつかず、なかなか納得にまでは至りません。なじみ深い単位で、直観的に理解できる『損失余命』が効果を発揮するのは、まさにそんな場面なのです」と所感を述べられたのだと思います。

ゆりちゃん：「安全」および「安心」の違いを解説した資料は他にもあるのですか？

タクさん：「安全」および「安心」については、これまで様々な報告があります。私はその中でも、武蔵川女子大学が提供する情報「MOTTO！食品衛生～食の安全サイト～（以下『MOTTO』という）」が、わかりやすいのではないかと思います。MOTTOから引用します。すなわち、『安全』と『安心』は、ほぼ同じ意味で使われているように思いますが、実は全く違います。私も企業で製品を作ってきましたが、『安全』な製品を消費者に提供できるように常に心掛けてきました。そうして一生懸命製品を作っても、果たして消費者は『安心』な商品として認めてくれるのでしょうか？『安全』な製品を作るために、その製品に使用する食品添加物や医薬品は、発がん性試験をはじめとするあらゆる安全性に関する試験を数十億円～数百億円かけて実施します。この試験により、安全に摂取できる量がわかり、厚生労働省に申請することで、使用基準が設定され、安全に使用することができるわけです。すなわち、『安全』は発がん性試験など科学的根拠となるデータにより確保できるわけです。」一方で、「このように安全性を確保した製品を消費者は『安心』して使ってくれるのでしょうか？これは、消費者それぞれの経験や知識など様々な要素によって違ってきます。『いくら安全だと言われても、この会社の製品は安心できない』という消費者もいらっしゃいます。そうです。『安心』は、ヒトの心（考え方）の問題ですので、しっかりとした『基準』はありません。それでは、どうすれば良いのかというと、消費者の信頼を得ることです。すなわち、事故や事件を起こさない（法令遵守ⁱⁱⁱ）ようにして信頼される会社（風土）を作るしかないのです。」ゆりちゃん！「安全」と「安心」は、まったく性質の違うものという意味が、十分に理解できたでしょうか？次回は、「ゼロリスクは達成できない」について、内容を探ってみましょう。（原産協会・人材育成部）

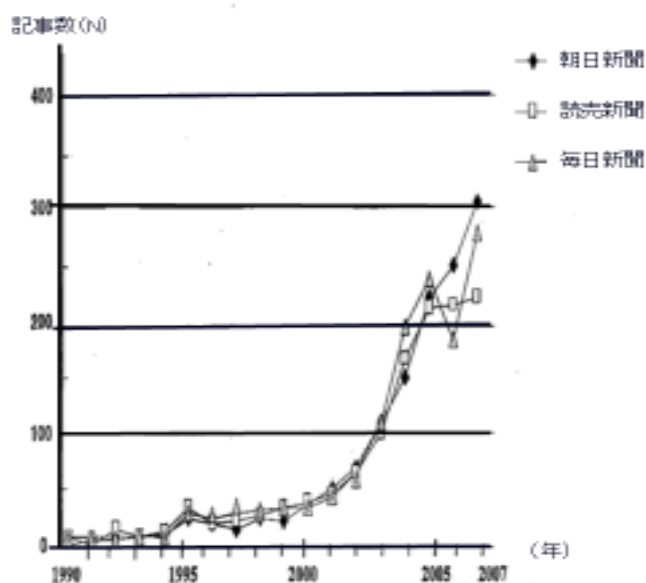


図1. 検索対象とした新聞全国版紙面における「安全・安心」等の用語を使用した新聞記事数の推移(1990年～2007年)

(刈間理介:「安全・安心等の用語使用の動向と安全教育のあり方について－わが国の新聞記事紙面および出版書籍の書名における用語の使用状況に関する検討から－安全教育学研究第8巻 第1号(2008)」より引用)

ⁱⁱⁱ 法令遵守は安全としての基本である。加えて事業者側には「自主的にどこまで安全を高められるか？その意識を常にもって事に当たる姿勢」が求められている。